

糖尿病治療の最前線

血糖コントロールの悪化とすい臓がん

病歴10年を過ぎて、すい臓がんが疑われたTさんのケース



担当医 久保 明先生

医学博士
糖尿病内分泌専門医
東海大学医学部抗加齢ドック教授

患者氏名	T・Y様	年齢	64歳	性別	男性	現病歴	糖尿病、単純性網膜症
------	------	----	-----	----	----	-----	------------

糖 尿病を発症して、10年近くになるTさん。ヘモグロビン Alc は6.5%前後で、ずっと飲み薬にて血糖値をコントロールされてきました。それがつい最近、急にヘモグロビン Alc が7%を超え、コントロールがうまくいかなかったのです。体重も短期間で2kgも減りました。中高年以降の糖尿病の患者さんが、このように突如としてコントロールが悪化した場合、まず疑われるのが「すい臓がん」の可能性です。すい臓がんは、60歳以上の男性に多く発症する疾患で、糖尿病と深い関わりをもつと考えられています。すい臓は血糖値をコントロールするインスリンなどのホルモンを分泌する臓器であるため、糖尿病の発症や悪化は、すい臓がんを疑うひとつの目安になるのです。

実際に、糖尿病のある方はそうでない方よりも、高い確率ですい臓がんを発症しやすいことがわかっています。すい臓がんは初期の段階では、ほとんど自覚症状がなく、早期発見が難しい病気です。Tさんの場合、とくに自覚症状はありませんでしたが、初期症状のひとつである体重減少があったため、すぐに大学病院で精密検査を行いました。しかしながら、CA19-9を用いた腫瘍マーカー検査やエコー(超音波)検査、CT検査では、異常は見られませんでした。大学病院からは、「血糖値が急に上がった理由がつかめない」という回答がありました。現在も、Tさんの血糖値は依然高いままですが、がんは発見されていません。しかし、未病の段階である可能性も否めません。すい臓がんの早期発見には精密検査が欠かせないため、今後インスリンの治療変更を含め、しっかりと診ていきたいと思えます。